

パフォーマンスプロファイリング活動が大学女子ハンドボール チームの集団凝集性及び集合的効力感にもたらす影響

長瀬 亜矢子（筑波大学）

1. 目的

複雑なスポーツパフォーマンスを評価する一つの方法として、パフォーマンスプロファイリング（以下 PPF と略す）というアプローチがある。本研究では、PPF の活用と改善に役立つ基礎資料を得るために、大学女子ハンドボールチームで2月から6月の5ヶ月間にわたって取り組まれた PPF の成果について、スポーツ集団の心理状態を手がかりにして事例的に解明する。

2. 研究方法

1) 対象者

筑波大学女子ハンドボール部員 21 名。属性については、学年、ポジション、競技歴、競技成績、戦術班への所属、試合への出場頻度を調査した。

2) 調査方法

集団凝集性に関するアンケート調査（13 項目、9 件法）、集合的効力感に関するアンケート調査（20 項目、5 件法）を PPF 実施前後に行った。PPF に対する選手評価（26 項目、5 件法）については実施後に行った。

3) 分析方法

集団凝集性及び集合的効力感を実施前後で比較するために、対応のある T 検定を行った。また PPF に対する評価を構成する因子を明らかにするために、主因子法による因子分析を行った。さらに、それぞれの調査について属性間での比較を行うために、独立した T 検定または一元配置の分散分析を行った。

3. 結果と考察

1) 集団凝集性

PPF 実施前は 6.47～8.87 点の範囲にあった。これは集団凝集性がすでに高かったことを示している。一方実施後は 6.73～8.53 点の範囲にあった。13 項目中 1 項目において前後で有意差が認められた。属性別にみると、戦術班所属、試合への出場頻度において有意差がある項目が実施後に少なくなった。

PPF では戦術班の所属に関わらず発言機会が設けられているため、非所属部員の自覚が生まれ有意差がみられなくなったと考えられる。また PPF では部員自身が目標設定を行うため、目標達成に対する責任は全部員に生じる。これにより出場頻度が低い部員の内発的動機付けが高まり、有意差がみられなくなったと推察される。

2) 集合的効力感

PPF 実施前は 3.60～4.60 点の範囲にあった。一方実施後は 3.53～4.47 点の範囲にあった。20 項目中 1 項目において有意差が認められた。属性別にみると、戦術班所属において有意差がある項目が実施後に多くなった。PPF で集合的効力感に関わる要因を目標として設定した際に、戦術班所属の部員の方が得点が低くなったことは、戦術班が改善点についてより多くの気づきを得たためと推察される。

3) PPF に対する選手評価

因子分析の結果 5 つの因子が抽出され、それぞれ成果、方法、コミュニケーション、相互理解、活用と命名した。コミュニケーション因子において、戦術班所属部員が非所属部員より、レギュラーが準レギュラーよりそれぞれ評価が高かった。戦術班所属部員やレギュラーは部員全体の中で話すことに慣れているため評価が高くなり、有意差が生じたと考えられる。

4. 結論

PPF は集団凝集性が元々高いチームに対してもそれを高め、PPF で設定される目標によっては集合的効力感を変化させる可能性がある。また、集団凝集性及び集合的効力感は、選手の属性によって差が生じやすい。

<主な参考文献>

養内豊・吉田聡美・伊藤真之助（2016）パフォーマンス・プロファイリングテストの作成. 北星学園大学文学部北星論集, 53 (2) : 9-17.